

# アイデンティティと過疎中山間地域 におけるおつきあい行動-日南町を事例に

鄭 蝦榮<sup>1</sup>・小林 潔司<sup>2</sup>・松島 格也<sup>3</sup>

<sup>1</sup>正会員 京都大学研究員 工学研究科都市社会工学専攻 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂)

E-mail: hayeong@hse.gcoe.kyoto-u.ac.jp

<sup>2</sup>フェロー会員 京都大学教授 京都大学経営管理大学院(〒606-8501 京都市左京区吉田本町)

E-mail: kkoba@psa.mbox.media.kyoto-u.ac.jp

<sup>3</sup>正会員 京都大学准教授 工学研究科都市社会工学専攻 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂)

E-mail: kkoba@kakuya@psa.mbox.media.kyoto-u.ac.jp

地域アイデンティティは、人々に地域への誇りや愛着を持たせ、地域の人たちにとって共に生きがいのある生活空間を作り出すための様々な活動を促進する役割を果たす。過疎中山間地域におけるおつきあい行動を分析し、それが、地域アイデンティティを形成・維持していることを、共分散構造モデルに再現し、その有効性を検証する。そのために、2では、文献レビューを通じてアイデンティティの役割と機能を理解する。3では、地域愛着に影響を及ぼす個人特性や地域活動特性について統計的に検討する。4では、共分散構造分析に基づいて、本研究のアイデンティティのモデルの有効性を検討する。最後に、過疎地域振興のためのアイデンティティ向上に関する政策を提言する。

**Key Words :** *marginal area development, place attachment, town activity, covariance structure analysis*

## 1. はじめに

アイデンティティは、地域の維持・発展に欠かせない重要な資源である。近年、中山間地域や離島における過疎化を防ぎ、活性化を図るため、様々な地域振興策が実施されている。その中で、地域アイデンティティの形成による地域振興施策が多数報告されている。このような取り組みの背後には、それぞれの場に適した生き方を尊重し、地域に昔からあった伝統や生活様式を活用しながら、まちを発展していこうとする志と、地域アイデンティティが、人々に地域への誇りや愛着を持たせ、地域の人たちにとって共に生きがいのある生活空間を作り出すための様々な活動を促進する役割を果たすという期待が潜在している。

アイデンティティとはいかに形成されるものか、それがどのように地域振興に寄与するか、についての科学的考察はまだ乏しい。交通手段が発達し通信技術が進歩したおかげで昔に比べ、コミュニケーション機会は増大しているものの、近所の人や地域とのつながりが希薄化している現代社会において、アイデンティティをどのように継承・創造していくか、その体制を整備することが重要な課題となる。

本研究では、地域振興におけるアイデンティティの役割に

対する理解を深めるとともに、アイデンティティ形成のメカニズムを考察することを目的とする。そのために、2節では、アイデンティティの概念と機能について考察し、地域振興に果たす役割を明確にする。3節では、過疎化が進んでいる中山間地域を対象として実施したアンケート調査に基づいておつきあいの実態と地域への誇りや愛着との関係を考察する。第4章では、おつきあい行動や地域への誇りや愛着を促進する潜在的な行動原理・規範として地域アイデンティティに着目し、共分散構造モデルを構築し、その因果構造を分析する。

以上の考察を通じて、アイデンティティの働きを明らかにするとともに、アイデンティティによる過疎・中山間地域の振興戦略に関する理論的枠組みの構築を目指す。

## 2. 基本的な考え方

### (1) 中山間地域の振興とアイデンティティ

近年、多くの中山間地域や離島では、急激な人口減少や高齢化により、就学、治療、娯楽、生活道路の整備、冠婚葬祭ができないなど、コミュニティ機能が低下し、必要最低限の生活水準を維持するための地域基盤が衰退するなど、過疎化が進んでいる。地域の資源管理や、ひいては、集落の存続や国

土保全を脅かし、国土全体に様々な弊害をもたらすことが懸念されている。

過疎・中山間地域の振興を促進するために、様々な施策が実施されている。起業や新たな事業展開、基幹道路整備を通じた周辺都市との連携・交流強化、地域資源を活かしたグリーンツーリズムなど、様々な取り組みがなされている。しかし、このような施策は、それまでの生涯を農・森・漁の1次産業に従事してきた地域住民の生き方や生活様式を大きく変えることになる。一方、アイデンティティによる地域振興策は、地域に昔からあった伝統や生活様式を活かした地域開発戦略として、注目を浴びている。アイデンティティの概念と機能を考察することによって、地域の発展におけるアイデンティティの働きを明らかにすることを試みる。

## (2) アイデンティティの概念と機能

アイデンティティについて、心理学、政治学、地理学など様々な分野において議論されてきた。共通する点は、アイデンティティは、自己存在を認識する際に用いるものであり、かつ自己存在を維持管理するための手段であると説明する。

アイデンティティの概念がはじめて論じられたのは、Erikson<sup>1)~4)</sup>の自我発達論や社会化理論である。Erikson は、アイデンティティは、人が自分は何者かを認識するために用いる手段であり、私は私以外の何者でもなく唯一無二の存在であるという実存性によって自己認識するもの(what we think about ourselves)であると定義した。そしてアイデンティティの重要な特徴として、自給できない財であり、他者との相互作用や社会的な活動による属性の影響を受けて段階的に確立されてものであると説明する。すなわち、他者や社会とのかかわりにおいて自分を問い直し、ひとつずつ選択を重ねることで、「私」という存在を明確にしていくものである。自分を問い直し、アイデンティティを識別するプロセス(アイデンティフィケーション)において一貫性(consistency)と独自性(distinctiveness)が常に働くと説明する。一貫性は過去の自己と現在の自己との関連づけした自己認識であり、過去の自分と現在の自分が同一の自己であるという記憶の一貫性に基づいて自我同一性を識別するものである。独自性は自己と他者との関係に基づいた自己認識であり、自分は他の誰でもなく自分として生きる他はないという唯一性、その存在価値(valuing a sense of uniqueness)に基づいてアイデンティティを識別するものである。

アイデンティティを維持するためには、自分の主張するアイデンティティをたえず承認し肯定してくれる他者がいなければならない。Goffman<sup>5)~6)</sup>は「個人が多様な他者との相互作用や社会的な活動を経て、確立してきた自己の一貫性、自己の独自性に関する主體的(subjective)・内省的(lexive)アイデンティティ」であると定義する。もし、他者による定義が自分にとって好ましくない場合は、アイデンティティは不安定なものとなり、その結果、一種の心理的危機におちる「アイデンティティ・クライシス(identity crisis)」が起こる。そして、アイデンティティは、社会的に望ましくないと判断され、蔑視と不信される属性(=スティグマ, stigma)を自ら管理するよう動機づける役割を

果たす。アイデンティティを管理するために、我々は他者とのおつきあいを繰り返し、他者の自分に対する評価や処遇を改善しようとする説明する。スティグマの3つのタイプとして、1)障害・老齢といった身体的変形、2)意志薄弱・暴力・不誠実さ・堅固な信念といった性格の欠点、3)人種・民族・宗教といった伝統的な集団を取り上げる。

以上の議論は、他者と自己の関係の中でアイデンティティの概念を整理したものであり、一般に自己アイデンティティと呼ぶ。

次に、場所との関係の中でアイデンティティを考察しよう。Proshansky<sup>7)</sup>によると、場所アイデンティティ(place identity)は、自己アイデンティティの下部構造であり、個々人が生きている物理的世界に関する認知であると定義される。自分は何者か、という問いに対して、自分がどこにいるか(Where am I)、自分がどこに所属しているか(Where do I belong)と問い直し、自分に関わる地域や環境の意味を使って状況に合わせた自己解釈を行うことである。

“アレキサンダー大王の遠征(330BC):人々のアイデンティティは都市(古代ギリシャの都市国家)に根ざしており、自己とコミュニティは密接に連結していた。そのころ、個人の死は、個人の魂にとっての最重要事項では無かった。個人の死後もコミュニティが存続するという認識が、死に対する恐怖をやわらげていたためである。アイデンティティが個人化されるほど、死は重大な問題となる。”

場所アイデンティティは、地域の伝統的文化や規範、近隣の人や地域とのつながりが生み出す道徳資本(moral capital)、地域意識(regional consciousness)、地域力(power of regions)といった概念としても捉える。このような場所アイデンティティは、同じ場所に住む他人との連帯や場所そのものに対する愛着や誇りを形成することにつながる。

他者、場所の他に、アイデンティティ形成に影響を及ぼす重要な要因として、Tajfel と Turner<sup>8)~9)</sup>は社会的カテゴリーを取り上げる。社会アイデンティティ(social identity)の新たな概念を提案し、集団間葛藤の生起過程を説明した。社会アイデンティティは、国家・民族・言語・帰属集団・職業・地位・家族・役割などの社会集団・カテゴリーとの関係を介して自己を認識するもの(what others understand about us)であり、自分が属している内集団(in-group)と属してない外集団(out-group)を識別し、内集団を肯定的に評価するべく、動機づける役割を果たすと説明する。Goffman<sup>5)~6)</sup>は、さらに社会アイデンティティを「即自的社會アイデンティティ(actual social identity)」と「対他的社會アイデンティティ(virtual social identity)」と区別する。即自的社會アイデンティティは、自分もつ実際の社会的カテゴリーに基づくアイデンティティである。一方、対他的社會アイデンティティは、他者が、知り得る社会的カテゴリーを用いて推測・期待・付与するアイデンティティである。自己と他者の間の情報や価値体系の違いにより、2つの社会アイデンティティは乖離し、その結果、スティグマが構成されると説明する。

存在脅威管理理論(Terror Management Theory)では、社会アイデンティティの超越的価値(The transcental value of social

identity)に注目する。自己の死の必然性(Mortality Salience)への認識は、「生きている意味／存在意義」に対する脅威であり、死すべき運命を超越したいという基本的欲求を充足させるよう、社会アイデンティティを通じて自己を空間的・時間的に延長し、不安や恐怖を緩和する。つまり、自己存在が脅かされることを認識すると、人は、文化的世界観を発達させ、文化的規範に準じた行動を取るようになるという。1) 文化的世界観に合致する行動を重視したり、それに違反する他者をきびしく罰したりする行動や、2) 自分はこの世界に対するまっとうな貢献者であるという信念、つまり自尊心を高める行動を取ることによって、人間は死に対する不安を緩和できるという。社会アイデンティティが高まることによって、内集団の象徴の防衛や集団の実体性(entativity)への知覚も高まる。

最後に、集合的アイデンティティ(collective identity)という概念を説明する。これは行為の志向性(orientation)と、そのような行為が生起する機会と制約の領域(field)に関する、一群の個人(あるいは、より複雑なレベルにおける諸集団)が生産する相互作用的かつ共有された規定(definition)と Melucci<sup>(10)-(11)</sup>は定義した。つまり、成員に共通する利害、経験、連帯から派生する集団によって共有された「われわれ意識＝仲間意識」ということである。それは、「帰属のネットワーク(network of affiliation)」を基盤として形成される。さらには、住民間・諸組織間に緊密な社会ネットワークを創出したり、彼らに共通したアイデンティティを共有させたりする。

以上、自己アイデンティティ、場所アイデンティティ、社会アイデンティティ、集合的アイデンティティの4つの概念を整理したが、地域アイデンティティというものは、この4つのアイデンティティによる相互作用により生まれるものであり、他の地域と区別される独自の文化、生活様式、景観といったその地域らしさを生み出すと考えられる。すなわち、地域住民の間で長年にわたって共有されてきた自分たちの規定であり、日ごろの交流を通じて維持管理される。社会ネットワークを創出し、交流の増大することによって新たな地域アイデンティティを形成することも可能である。近年、地域アイデンティティの形成が、地域への愛着や誇りを与え、地域の再生・活性化につなげるとして、その重要な役割に期待が高まっている。特に、過疎化の問題を抱えている多くの中山間地域において、文化活動や日ごろの交流を拡大することによって地域アイデンティティの再認識しようとする取り組みが拡大している。

### (3) アイデンティティとおつきあい

前節では、アイデンティティがスティグマ管理や存在危機管理を動機づける要因であることを示した。スティグマの管理は、情報制御を通じて対他的社会アイデンティティを変化させることによって行われる。一方、存在危機管理は、文化的規範に準じた行動することで不安や恐怖を緩和するものである。このようなスティグマ管理や存在危機管理にあたって、おつきあい行動が行われる。例えば、高齢者は、老後といったスティグマを管理・修正するために、老人会など、自分と同じ状況にある他者との交流を行うことで、自分の状況を正しく理解し、自分と相手とのつきあいに相応しい活動、高齢者というアイデン

ティティに相応しい生活様式をつくりだす。しかし、自分のアイデンティティを承認してくれる相手がいない場合、そのアイデンティティはなくなる。また、スティグマのある人が自身の特異性に対する他人の評価が低い場合は、マネジメント意志が弱く、アイデンティティを承認されることなく、失われる場合もありうる。このように自らの力ではアイデンティティをマネジメントすることができず、失ってしまう場合、これをどのように維持管理していくかが、重要な問題となる。

AkerlofとKranton<sup>(12)-(15)</sup>は、アイデンティティとおつきあい(他人との交流)との関係を式(2.1)と(2.2)を持って説明する。

$$U_j = U_j(\mathbf{a}_j, \mathbf{a}_{-j}, I_j) \quad (1a)$$

個人 $j$ の効用 $U_j$ は、自分の行動ベクトル $\mathbf{a}_j$ 、他人の行動ベクトル $\mathbf{a}_{-j}$ 、自分のアイデンティティ $I_j$ に依存する。 $\mathbf{a}_j$ と $\mathbf{a}_{-j}$ が個人 $j$ の消費するサービスの水準を決める。

$$I_j = I_j(\mathbf{a}_j, \mathbf{a}_{-j}; \mathbf{c}_j, \boldsymbol{\varepsilon}_j, \mathbf{P}) \quad (1b)$$

ここで、アイデンティティ $I_j$ は、まず、個人 $j$ が属する社会的カテゴリー・ベクトル $\mathbf{c}_j$ に依存する。この際、各 $\mathbf{c}_j$ の社会的地位は、所要である。例えば、個人 $j$ が農民であるとしよう。職業カテゴリー $\mathbf{c}_j^o$ に対する農民の社会的地位は所与であり、それが高ければ高いほど、アイデンティティが高くなる。次に個人 $j$ の特性ベクトル $\boldsymbol{\varepsilon}_j$ と個人 $j$ が属するカテゴリーの理想像との適合度に依存する。例えば、農民の理想像が、男性で、健康で、大家族で、経済的に余裕のある人である場合は、その適合度が低く、アイデンティティが低くなることを意味する。この際、その適合度の基準となるのが $\mathbf{P}$ であり、本研究ではこれを各社会的カテゴリーに対する適切な行動規定と呼ぶ。 $\mathbf{P}$ は、共有知識であり、他人とおつきあいを通じて更新されるものである。

すなわち、個人は、 $\mathbf{P}$ に相応しく行動することによって、自分の効用を高める。または、自分の特性に対する社会的評価が高くなるよう $\mathbf{P}$ を更新することによって、自分の効用を高める。おつきあいは、自分の行動に対する $\mathbf{P}$ との適合度を確認する上で、かつ、 $\mathbf{P}$ の共有信念を更新する上で、重要な役割を果たす。

## 3. おつきあい調査の概要と基礎分析

### (1) 調査の概要

アイデンティティに対するおつきあいの働きを考察するために、過疎・中山間地域を代表する鳥取県日野郡日南町においておつきあい調査を実施した。日南町は、鳥取県の南西部に位置する山間農業地域である。高齢化・過疎化が進み、市町村合併が推進され、現在は、日野上、山上、大宮、阿毘縁、多里、福栄、石見の7か村で構成されている。国勢調査<sup>(16)</sup>によると、1960年から2005年までの45年間、人口の半分も減少した。図1は、男女と65歳以上の人口推移を表すものである。

日南町の人口推移(1960年-2005年)

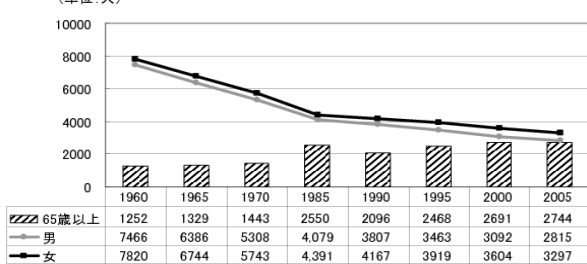


図-1 日南町の人口推移

男女とも人口が減り続けているのに対し、65歳以上の高齢者は増え、2005年には町人口の約半分を占めるようになった。その後も人口減少はさらに進み、2006年4月1日には、山上・阿毘縁・大宮の3小学校が統合、2009年4月1日には町内の全6小学校(日野上・山の上・多里・石見東・石見西・福栄)が統合され、生活基盤が大きく崩れている。日南町の7か村は、それぞれ異なった独特な歴史・文化・生活様式・自然資源をもっている。日野上には、役場、病院、学校などの公共施設、大型スーパー、銀行が集まっており、町の中心となっている。自然豊かな山上・多里・福栄・大宮には、ヒメボタル、天然記念物のオオサンショウウオ、天然桜草、印賀鋼など貴重な天然資源の宝庫となっている。阿毘縁は、高い標高を利用したトマト、お米、りんごなどの地域特産品の産地である。石見には、雪の多い冬にはスキーの名所として、花の咲く春にはつつじの名所として多くの観光客が訪れる。以下の表-1に調査方法をまとめる。

表-1 調査方法

調査期間	2009年11月1日～2009年12月31日		
母集団	日南町に居住する15歳以上の男女個人		
母数	4,947	回収率	64.8%
サンプル数	3,206(部分欠損有)		

調査実施は、日南町の7か村のまちづくり協議会の協力を得て、各世帯へ配布・回収してもらった。アンケート質問紙の設計は、過疎地域研究会MARGで検討された。質問紙は、世帯票と個人票により構成され、各世帯に世帯票の一票と家族数の個人票を配布した。世帯票では、居住地、家族構成、町内の家族や親戚の居住、所得に関する情報を尋ねた。一方、個人票では、個人特性、地域への愛着や誇り度合、自分がかかわっている地域活動、おつきあい、防災活動に関する情報を尋ねた。

世帯票は、4つの質問項目から構成される。

質問1：世帯の居住地

質問2：世帯の家族数と家族構成

質問3：世帯外の家族や親戚の居住地、日南町内に居住する世帯外の家族や親戚の人数と関係

質問4：世帯の年間収入

個人票は、以下の6つの質問項目から構成される。

質問1：性別・年齢・職業・1日労働時間・出生地・勤務地・居住年数の個人属性

質問2：日南町・近隣住民に対する愛着・誇り度(14

項目・5段階)

質問3：自分がかかわっている地域活動の内容・頻度・動機・活動時間・費用・場所・成果

質問4：おつきあいの内容・相手数・相手との関係・場所・時間・頻度・移手段・費用

質問5：2000年10月6日発生した鳥取県西部地震時の被害・防災活動・防災対応・助け合い状況

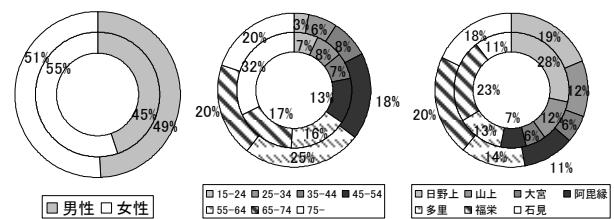
質問6：現在の防災活動・対応策・助け合いの相手

本研究では、個人特性、愛着や誇り度合、地域活動のデータを対象として分析する。

## (2) 基礎分析

### a) 母集団と標本の比較

母集団に対する標本の代表性を検証するために、性別(左)、年齢(中)、居住地(右)を用いて比較する。



(母集団:内輪, 標本:外輪)

図-2 母集団と標本の比較

女性、25歳以下、75歳以上の年齢、日野上が標本に比較的少なく含まれているが、構成割合には、差がないことから標本が母集団を代表できると判断する。

### b) 標本の特徴

欠損の無い659サンプルに対して、居住地、家族数、性別、年齢、職業、労働時間、出生地、勤務地、居住年数、地域愛着誇り度の順に変数間の関係を考察する。図5の下三角は相関係数、上三角は散布図、対角は度数分布図、赤線はLowess曲線をそれぞれ表す。

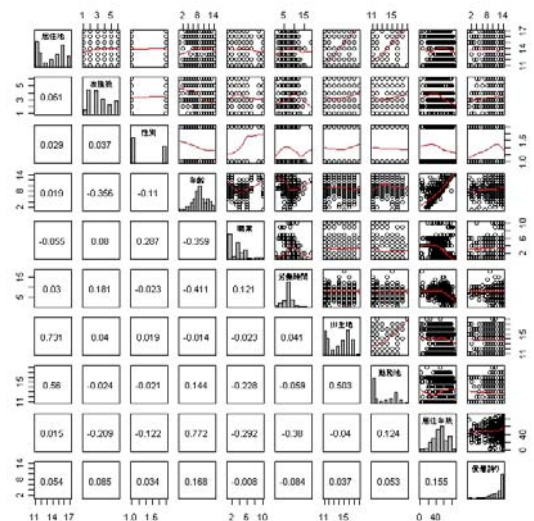


図-3 変数間の相関係数と散布図

相関係数の有意性を判定するために、t検定を行った。相関係数の絶対値が0.2以上の変数間のp値はすべて0.05より小さいため、母相関係数がゼロという帰無仮説は棄却され、有意な相関があるといえる。相関係数の絶対値が0.2以上でありLowess曲線が右上に上がる変数間の関係をより詳しく検討する。まず、居住地と出生地・勤務地の関係を検討する。居住地が出生地と一致する人は78.2%、町内である人は99.5%である。勤務地が居住地と一致する人は66.0%、町内である人は99.7%である。女性の場合、町外出身者が多いことを考慮すると、男性のほとんどは、生まれたところに住み続け、働く傾向が強いといえる。次に、年齢と居住年数の関係を検討する。サンプルの平均年齢は、54.9歳、平均居住年数は51.1年である。65歳以上の高齢者の平均年齢71.3歳、平均居住年数は68.6年と、年齢と居住年数の間には約3年の差と、ほとんどの人が生涯のほとんどを日南町で過ごしていることが分かる。ここで地域愛着誇り度は、以下の価値観や信念に対する14質問項目の5段階評定(「大いに思う(5)」,「やや思う(4)」,「どちらともいえない(3)」,「やや思わない(2)」,「全く思わない(1)」)に基づいて、主成分分析を行い、負荷量が高いものを地域愛着誇り度と定義する。

表-2 住民の価値観の主成分分析

変数	主成分負荷量	
	第1	第2
日南町に郷土としての誇りや愛着をもっている。	-0.54	<b>0.44</b>
日南町の自然や景色が素晴らしいと思う。	-0.49	<b>0.47</b>
日南町で手に入れることができる食材は素晴らしいと思う。	-0.51	<b>0.53</b>
町や地域で行われるイベントや祭りを手伝うことは大事である。	-0.59	0.08
町や地域の掃除や環境をよくするために協力しあうことは大事である。	-0.60	-0.04
地域の子供たちの成長のために教育活動に参加することは大事である。	-0.59	-0.10
他人の悩みごとの相談のってあげることが大事である。	-0.51	-0.26
ご近所との日常的なお付き合いを続けることは大事である。	-0.63	-0.31
一人暮らしの人やお年寄りの方の世話をすることは大事である。	-0.60	-0.29
先祖を大事にし、地域の墓を守っていくことは大事である。	-0.53	-0.32
日南町に住んでいる親戚とのお付き合いは大事である。	-0.62	-0.31
日南町の人々は自分にとって大切な存在である。	-0.68	-0.09
今後も、今住んでいる所に住み続けたいと思う。	-0.52	<b>0.17</b>
子どもたちが日南町を郷土として誇れるようにしたいと思う。	-0.67	<b>0.22</b>
固有値	4.72	1.24
寄与率(%)	33.7	8.9
累積寄与率(%)	33.7	42.6

人が、社会資本が乏しい過疎地域に長年住み続けられる原動力は何か。図-3から、居住年数との相関係数が0.2以下であるが、Lowess曲線が右上に上がっている変数として愛着誇りがあることに注目したい。長年住み続けることが地域や近隣の住民への愛着や誇りを持たせる、或いは、愛着や誇りが長年住み続けることを促す、その背後に働いている原理を追求する。次節では、愛着誇り度にどのような活動が影響するか検討する。

### c) 地域活動

本研究では、地域活動を、自分と他者がめざす居場所や共に生きがいのある生活空間を作るためのおつきあい行動と定義する。まず、どのような地域活動が行われているかを集計した。日南町では、総157活動(町全体16, 日野上23, 山上17, 大宮33, 阿毘縁14, 多里19, 福栄15, 石見20)が行われている。以下の図-4は、実際地域活動がどの程度行われているかを示す。参加するより参加しないと答えたほうが多く、地域活動が活発に行われているとは判断しにくい。

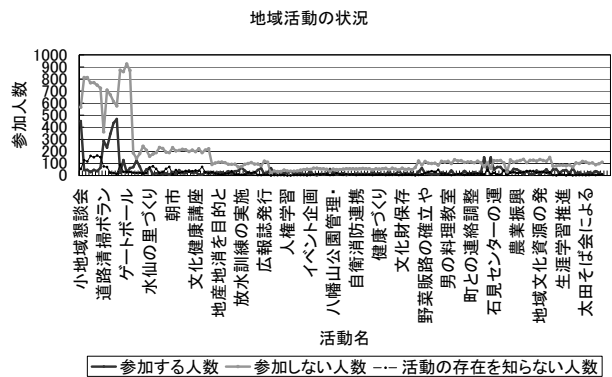


図-4 地域活動の実施状況

どのような地域活動が愛着・誇りに影響するかを調べるために、地域活動をその内容や特徴によって分類する。

表-3 地域活動の分類

タイプ	活動内容
タイプ1	小地域懇談会
タイプ2	消防・防災・防犯・放水訓練活動
タイプ3	100キロマラソン運営, スポーツレクリエーション祭, 地域体育行事, 体育協会連携, 野球, 町の体育行事, 地域の体育行事, 生涯スポーツ普及奨励
タイプ4	道路清掃ボランティア
タイプ5	文化祭, 地域文化祭の企画, 盆踊り大会, ふる里まつり
タイプ6	配食ボランティア, ボランティア給食, ボランティア活動, ボランティア体験学習, 環境美化活動, 敬老会・運動会・環境整備のあり方検討, イベント企画, 高齢者の安心・安全, 閉校行事, 交通安全運動, 日南の水を守る会, 日南の水を守る会, 健康づくり, いばら元気会, オオサンショウウオの会・鳥取県日南町大会, 水仙の里づくり, 桜街道づくり, まごころサービス
タイプ7	生涯学習の推進, 学習情報の提供, 同和教育推進, 学習機会の提供, 伝統行事伝承, 伝統芸能保存, 文化財保存
タイプ8	農業振興, 野菜販路の確立や新規拡大, 地産地消を目的としたソバの振興, 旬菜便の拡大

このタイプ分けは、活動内容、活動頻度、参加者規模、参加のきっかけ(強制/自発)、活動場所、活動成果が類似しているかどうかを基準として分類した。

おつきあいとアイデンティティとの関係を調べるために、クロ



ス分析を行い、活動に参加している人と参加しない人の価値観の差があるかを調べた。ここで価値観の平均値は、価値観の14項目に対してすべて4か5と評価した場合は、14としたものの平均値を意味する。以下図-5は、その結果を示したものである。

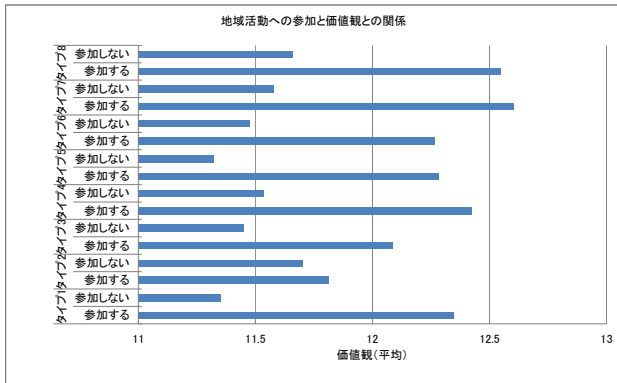


図-5 価値観と地域活動のクロス分析

すべての活動タイプにおいて、活動に参加すると答えた人が、地域への愛着やほこりに関する価値観が高いことが明らかである。活動を介した日常交流は、住民の価値観に影響すると言えるだろう。そして、このような活動の継続が、住民同士において地域の理想像に対する更新を促し、伝統的な理想像を継承するように働くと考えられる。

#### 4. 本研究の共分散構造モデル

本研究では、共分散構造モデル<sup>17)-18)</sup>の内、測定方程式と構造方程式を持って観測変数の因果関係に1つの潜在変数(共通因子)を仮定するMIMICモデル(Multiple effect Indicators for Multiple Causes)を用いて、アイデンティティの形成構造を解明する。共分散構造分析は、潜在変数を導入することによって、類似した傾向を示す観測変数をまとめることができる。また、潜在変数間の因果関係を検討すれば、多くの変数間の関係を直接扱うより効率がよい。共分散構造分析を用いた主観的価値評価を行った先行の研究<sup>19)-20)</sup>がある。

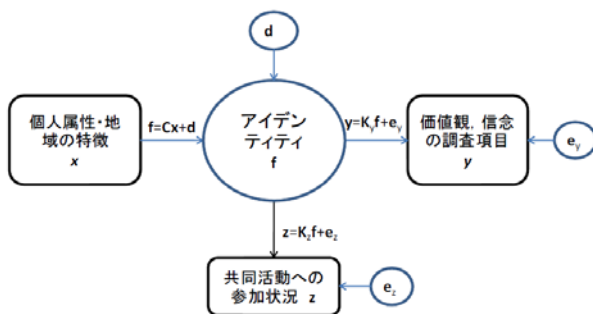


図-6 共分散構造モデル

図-6 は、アイデンティティの共分散構造モデルを表したもので

である。2節、3節での考察に基づいて、本研究では個人の特性だけではなく、地域の特性もアイデンティティの形成に影響し、またそれが価値観や地域の活動を生み出すと仮定する。

表-4 変数の概要

	観測可能変数		観測不可能変数
	$x$	$y$	$z$
係数	$C$	$K_y$	$K_z$
誤差	-	$e_y$	$e_z$

$$f = Cx + d \quad (1c)$$

$$y = Kyf + e_y \quad (1d)$$

$$z = Kzf + e_z \quad (1e)$$

ここで、行列Cは観測変数の個人属性・地域特徴 $x_j$ から地域的アイデンティティ構造概念 $f_i$ への規定力を表現する係数 $c_{ij}$ を $ij$ 要素に配したサイズ $nf \times nx$ の係数行列である。行列 $K_y$ は地域的アイデンティティ構造概念 $f_j$ から個人の地域への感情・考慮 $y_i$ への規定力を表現する係数 $ky_{ij}$ を $ij$ 要素に配したサイズ $ny \times nf$ の係数行列である。行列 $K_z$ は地域的アイデンティティ構造概念 $f_j$ から個人のおつきあい行動 $z_i$ への規定力を表現する係数 $kz_{ij}$ を $ij$ 要素に配したサイズ $nz \times nf$ の係数行列である。また、アイデンティティの複数構造概念の間にも互いに規定され、サイズ $nf \times nf$ の行列 $A_f$ の要素 $ij$ の $a_{ij}$ で構造概念 $f_j$ から構造概念 $f_i$ への規定力を表現される。

##### (1) 変数の設定

本研究では、アンケート調査項目として、性別・職業・居住地やカテゴリー化した年齢・家族人数など、量的変数と質的変数が混雑しているため、ダミー変数を用いることにする。共分散構造分析には、多重共線性の発生がよく問題となる。この問題を回避するように変数を設定するために、偏相関係数を用いて変数間の相関生を評価する。その結果、相関係数が高い9つの変数ペア「年齢40-64歳と年齢65歳以上(-0.778)」、「家族数2人と3人(-0.835)」、「出生地山上と居住地山上(0.652)」、「出生地アビレと居住地アビレ(0.645)」、「出生地大宮と居住地大宮(0.700)」、「出生地多里と居住地多里(0.711)」、「出生地石見と居住地石見(0.687)」、「出生地福栄と居住地福栄(0.616)」、「居住年数5-19年と居住年数20年以上(-0.90)」を確認した。マイナス相関が強い「年齢40-64歳と年齢65歳以上」、「家族数2人と3人」、「居住年数5-19年と居住年数20年以上」は、それぞれ年齢・家族人数・居住年数を表すものとして、65歳以上の高齢者が半分以上、2人家族が半分以上、20年以上居住者が半分以上である日南町ならではの特徴をよく表す。本研究では、65歳以上、2人家族以上、20年以上居住のダミー変数を用いて分析を行うこととする。そして、プラス相関が強い変数ペアについてはそれぞれ、出生地と居住地としての7か村を表すものである。

以下の図-7は、出生地と居住年数の関係を表すもので

あり、町内に生まれた人が、50年以上住み続けるケースが400以上と多く、一方、町外の人の居住年数は、10年以下と比較的に短い。多くの人が生まれた場所に住み続けるため高くなると考えられる。分析には居住地の変数を代表に用いて分析を行うこととする。

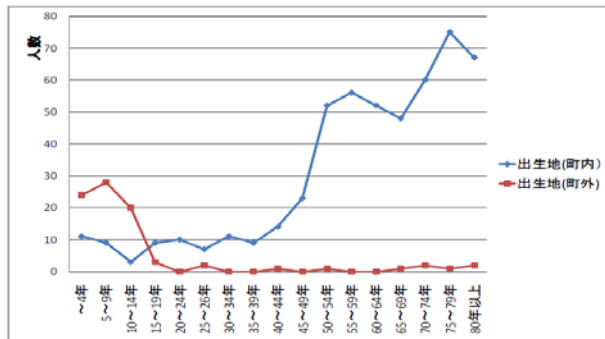


図-7 出生地と居住年数

次に、日南町の7つの地域のうち、地域間の特徴に基づいてクラスター分析を行った。地域の特徴は人口構成、世帯構成、親戚の居住有無、世帯年収、住民の個人属性(性別・年齢・職業・平均一日の労働時間)、居住年数を変数として用いて分析した。その結果、地域を大きく2つに分類できる。阿毘縁・大宮・山上・福栄・多里が同じクラスに属する。これらの村は、人口が少なく、高齢者が多く、住民の多くが農林業に携わり、街の中心地から離れている共通の特徴が見られる。

表-5 村のクラスター分析

クラスター	村1	村2	個体数	距離
6	山上	福栄	2	71.56
5	阿毘縁	大宮	2	93.90
4	CL6	多里	3	115.55
3	日野上	石見	2	302.44
2	CL4	CL5	5	312.55
1	CL3	CL2	7	953.84

## (2) パス設計

本研究では、共分散構造モデルを構築するために、観測変数と潜在変数の間の関係(パス)を主成分分析と因子分析に基づいて構成することとする。

まず価値観(Y)について、各変数の意味論的な解釈を行う場合は、地域とのつながりを重視する Y1, Y2, Y3, Y13, Y14 と、人とのつながりを重視する Y4, Y5, Y6, Y7, Y8, Y9, Y10, Y11 と分類することが可能である。一方、表2で機械的に行った主成分分析では、固有値1以上の主成分2つが得られた。そして、各変数 Y1, Y2, Y3 は主成分2と、Y4, Y5, Y6, Y7, Y8, Y9, Y10, Y11, Y12, Y14 は主成分1と強く関連することを確認した。その結果、Y1・Y2・Y3 群と Y13・Y14 群が似ていることがわかる。

次に、地域活動については、参加の自発的動議を重視する Z5, Z6(自発的活動)と、Z1, Z2, Z3, Z4, Z7, Z8(強制的活動)と分類することができる。一方、町の自治・環境整備を重

視するか、人とのつながりに基づいた自己発見・楽しみを重視するかという観点から分類すると、Z1, Z2, Z4, Z8(町振興・環境整備)と Z3, Z5, Z6, Z7(自己開発・楽しみ)と分類できる。機械的に行った主成分分析結果では、固有値1以上の主成分2つが得られた。そして、各変数 Z1, Z5 は主成分1と、その他は主成分2と関連することを確認した。

以上の X, Y, Z 変数に対する主成分分析の結果に基づいて、潜在変数を2つ(F1, F2と名づける)と仮定し、潜在変数と X, Y, Z の間の対応関係をモデル化した。ここで、二つの潜在変数が何かについては、それぞれ「地域とのつながり」「人とのつながり」にかかわるアイデンティティと仮説する。それは、第2章での考察に基づいて、人がアイデンティティを自己認識・評価する際、鏡となる他者として重要とされることが、大きく「人」と「環境(地域)」に分類されると仮定するものである。

まず、価値観を表す変数Yに対するそれにかかわる潜在変数(アイデンティティ)がどれぐらい存在するかを確認するために構造方程式モデリング(SEM)を行い以下の表6の結果を得た。適合度がより高いモデル2を採用してパスを設計する。

表-6 価値観とアイデンティティの構造方程式モデリング

	モデル1	モデル2	モデル3
Y1,Y2,Y3	F1	F1	F1
Y4,Y5,Y6,Y7,Y8,Y9	F2	F2	F2
Y10	F2	F2	F1
Y11	F2	F2	F1
Y12	F2	F2	F2
Y13	F2	F1	F2
Y14	F2	F1	F2
Model Chisquare	557.5	520.39	682.09
Df	76	76	76
Goodness-of-fit index	0.93	<b>0.94</b>	0.92
Adjusted goodness-of-fit index	0.91	<b>0.92</b>	0.89
RMSEA index	0.07	<b>0.06</b>	0.07
Bentler-Bonnett NFI	0.87	<b>0.88</b>	0.84
Tucker-Lewis NNFI	0.86	<b>0.87</b>	0.83
Bentler CFI	0.88	<b>0.89</b>	0.85
SRMR	0.04	<b>0.04</b>	0.05
BIC	13.5	<b>-23.6</b>	138.1

個人・地域属性Xと活動Zも同様にそれぞれのモデルの適合度に基づいてパスを設計し、その結果、もっとも推定精度が高くなるような変数とモデル構造を最終的に選択した。

図8は、最終的に得られた構造を表すであり、アイデンティティが地域活動や地域への愛着や誇りを向上させるという仮説を保障する結果であると考えられる。

65歳以上の変数から潜在変数へのパス係数が比較的に高く、それは、高齢という属性がアイデンティティへ大きく影響することを意味する。高齢者は、長年にわたって町に居住しているため、町の他の人や町の環境とのかかわりや連帯感が強いためであると考えられる。公務員・教員と自営業(農林業)の職

業に関する変数とアイデンティティへのパス係数が高いことから、このような職業を持っている人は、地域活動に積極的に参加し、おつきあい行動をよく行うと考えられる。

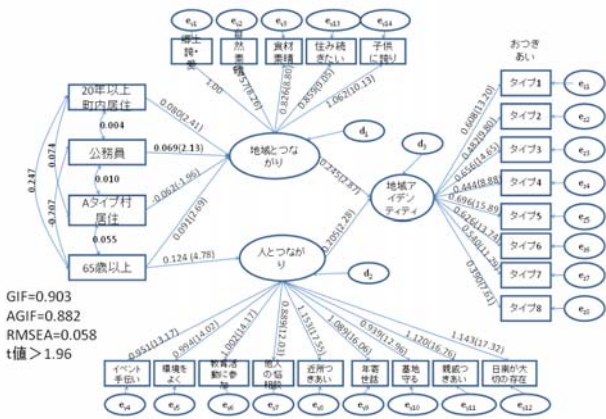


図-8 アイデンティティの共分散構造

また、村ごとの異なる特性や人口構成が異なる地域アイデンティティを生み出すことを確認した。例えば、「大宮」「多里」「福栄」の地域とアイデンティティの関係を表すパス係数が異なることから、地域の文化や生活様式がアイデンティティに及ぼす影響は大きいと言えるだろう。すなわち、これらの村に職場、出生地、居住地といったなんなかのかかわりのある人は、地域や近隣の人に対する愛着や誇りが、町内の人々とのつながりを重要とするため、地域活動によく参加し、おつきあいを行っている。最後に、アイデンティティがおつきあい行動を促進するかを各活動タイプへの係数から確認できる。アイデンティティとおつきあい行動タイプ 4(道路清掃ボランティア)と8(農産・産業振興)の関係は、ほかの活動タイプに比べ比較的小さいと解釈できる。パス係数の一番大きい値をもつのは、おつきあい行動タイプ 5(祭り)であり、逆に、道路清掃ボランティアなどの環境保全のおつきあい行動タイプ 4 や農産・産業振興のようなおつきあい行動には影響力が低い。それは、アイデンティティが、強制的なあつきあいよりは、自発的なおつきあい・楽しいおつきあいをより促進すると解釈できる。

## 5. 政策的含意

中山間地域を活性化図る上で地域におけるおつきあい行動に大勢の人が参加するように対策を政策が必要である。共分散構造モデルを用いてアイデンティティと地域活性化との関係の究明を試みた。モデルにおける矢印は、各変数間の因果関係を表し、矢印の上に記載されている数値がパスの係数を表し、それが正であれば正の影響がであり、負であれば、因果関係は負の影響である。また、係数が大きければ大きほど影響力も高まる。分析結果から地域アイデンティティを高め、地域におけるおつきあい行動によく参加する要因によるその要因に対応する政策を提案すれば、得られる結果は地域に

おけるおつきあい行動も活発になると考えられる。逆に、係数が負の場合なら要因に対する改良対策作成は重要である。

日南町におけるおつきあい行動に関する共分散構造分析結果、町に長く住み続けた人が、おつきあい行動をより積極的に行うことによって、自分と近隣の人に相応しい環境・生活様式を生み出し、よりたくさんの人々の参加を促進することを明らかにした。例えば、農林業は多くの住民の職業であり、さらにこの農林業に従事する住民は地域におけるおつきあい行動との正の関係にあるので、地域における農林業を支援する政策があれば、農林業の住民は、安心して長く町に住み続けられる、おつきあい行動に積極的に取り組む、地域を振興させる、といった一連の整合した行為をとるだろう。さらに、公務員・教員は、地域におけるおつきあい行動に積極的に参加するものなので、このような人を中心に、より多くの人々を誘っておつきあい行動に参加するような対策を取ることは、有効な地域振興策であるだろう。また、大宮に住んでいる住民たちは、町内の他の地域に住んでいる住民より地域アイデンティティが低く、地域におけるおつきあい行動には他の地域の住民と比べると、あまり参加はしないので日南町を活性化対策において大宮地域を重点的に取り上げることが重要である。一方、多里、福栄にかかわっている人たちは、地域的アイデンティティが他の地域で働いている人より高く、地域におけるおつきあい行動も積極的に参加しているので、これらの地域での働く環境をよく整備することによって、これらの地域で働く人が増え、地域におけるおつきあい行動が増加するようになるだろう。

## 6. まとめ

本研究では、中山間地域を活性化するために、地域的アイデンティティが貴重な財産であることに着目し、地域振興においてその財産がどのような役割を果たすかを測定することを目的とした。そのために、中山間地域におけるおつきあい行動を把握するため、共分散構造分析を用いて、地域的アイデンティティが介在し、住民のおつきあい行動に規定するモデルを検証した。2 節では、中山間の過疎現状と中山間を活性化するためにおつきあい行動を活発させる必要性を述べた後、アイデンティティについての従来の研究からアイデンティティの概念を説明した。それより、理論的にアイデンティティの形成による地域におけるおつきあい行動を活発させ、地域を振興させる可能性をみられた。

3 節では、代表的な中山間地域として鳥取県日野郡日南町を対象として行った「おつきあい調査」データを用いて基礎分析を行った。この基礎分析に基づいて日南町の特徴を把握した。そして住民の地域や近隣住民に対する価値観・信念や町内における町民がおつきあい行動の動向を明示した。それより、個人属性・地域特徴が地域や近隣住民に対する価値観・信念やおつきあい行動に影響を及ぼすことを確認した。4 節では、地域アイデンティティが介在し、日南町におけるおつきあい行動に関する共分散構造分析を行った。アイデンティティ



いは観測できない潜在変数であるが、観測できる三つの変数(個人属性・地域属性、地域に対する住民の愛着・誇り、おつきあい活動)からその関係を仮定した。結果、地域への愛着・誇りがアイデンティティの形成に影響を及ぼすものとして、アイデンティティの内部構造として大きく地域とのつながりと地域の人とのつながりに区分して説明することができた。本モデルの結果を用いて、地域におけるおつきあい行動の活性化による中山間地域を活性化させる方向の知見を得ることができた。

今後の課題として、本研究では鳥取県日南町における「おつきあい調査」データを使用し町内の住民を調査対象で、町内におけるおつきあい行動のみを分析の対象としたものである。結果、町内の住民による町内におけるおつきあい行動を活性化可能性の知見を得られたが、地域を活性化するために町内の範囲だけではなく他の地域とおつきあいも重要である。さらに、地域を活性化し、人口減少を防止するためには地域外の人との交流(おつきあい)を促す対策が必要である。

## 参考文献

- 1) 総務省, 国勢調査, 1960-2005.
- 2) Erikson, E.H.: *Childhood and society*, New York: Norton, 1950, (草野栄三良訳『幼年期と社会』日本教文社, 1956).
- 3) Erikson, E.H.: *Identity and the life cycle*, New York: Norton, 1959, (小此木啓吾訳『自我同一性』誠信書房, 1973).
- 4) Erikson1 Erikson, E.H.: *Identity: Youth and Crisis*, New York: Norton, 1968.
- 5) Erikson2 Erikson, E.H.: *Dimensions of a New Identity*, New York: Norton, 1974.
- 6) Goffman, E., *The Presentation of Self in Everyday Life*, Doubleday Anchor, 1959 (石黒毅訳, 「行為と演技—日常生活における自己提示」, 誠信書房, 1974).
- 7) Goffman, E.: *Stigma and Social Identity*, *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*, Prentice-Hall, 1963 (石黒毅訳, 「スティグマの社会学」, せりか書房, 1970).
- 8) Proshansky, H.M., Fabian, A.K., Kaminoff, R.: *Place-Identity: Physical World Socialization of the Self*, 1983.
- 9) Tajfel, H.: *Human Groups and Social Categories*, Cambridge University Press, Cambridge, 1981.
- 10) Tajfel, H. Turner, J., *The social identity theory of intergroup behavior*, In S. Worchel and L. W. Austin (eds.), *Psychology of Intergroup Relations*, Chicago: Nelson-Hall, 1986.
- 11) Melucci, A.: *Nomads of the present: Social movements and individual needs in contemporary society*, London: Hutchinson Radius, 1989.
- 12) Melucci, A.: *Challenging codes: Collective action in the information age*, New York: Cambridge University Press, 1996.
- 13) Akerlof, G.A. and Kranton, R.E.: *Economics and identity*, *The Quarterly Journal of Economics*, CXV(3), 2000.
- 14) Akerlof, G.A. and Kranton, R.E.: *Identity and the Economics of Organization*, *The Journal of Economic Perspectives*, Vol.19, No. 1, pp.9-32, 2005.
- 15) Akerlof, G.A. and Kranton, R.E.: *Identity and the Economics of Organization*, *The Journal of Economic Perspectives*, Vol. 19, No. 1, pp. 9-32, Winter 2005.
- 16) Akerlof, G.A. and Kranton, R.E.: *Identity economics: How our identities shape our works, wages, and well-being*, 2010.
- 17) 豊田秀樹: 共分散構造分析—構造方程式モデリング(入門編), 朝倉書店, 2006.
- 18) 豊田秀樹: 共分散構造分析—構造方程式モデリング(応用編), 朝倉書店, 2000.
- 19) 松本直仁, 主観的幸福における社会的なつながりの価値の明確化—対人関係ネットワーク構造モデルによる主観的幸福の規定因分析—, 慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科システムデザイン・マネジメント専攻修士論文, 2009.
- 20) 松島格也, 湧川勝巳, 大西正光, 伊藤弘之, 小林潔司: 水害による被災家計の精神的被害の経済評価, 土木計画学研究・論文集, Vol. 24, pp. 263-272, 2007.

## IDENTITY AND COMMUNICATION IN MARGINAL RURAL AREA — CASE STUDY OF NICHINAN TOWN IN JAPAN—

Hayeong Jeong, Kiyoshi Kobayashi, Kakuya Matsushima

Collective identities play an important role in place-making. It empowers community movements to build up a common space worthwhile to live in with pride as well as attachment to their place. The aim of this study is to investigate the relationship between collective identities and neighborhood (or community) based activism by a covariance structure analysis. The analysis is based on a survey of community activities in Nichinan town which is a typical depopulated rural area in Japan. In order to find the answer to the question, how and why collective identities motivate community activism, some literature reviews on identity for collective action are presented in section 2. The results of basic analysis on the community activities in Nichinan town are shown in section 3. The validity of the covariance structure analysis on identity and community activities in this study is discussed in section 4. Finally, a policy to motivate identities which could foster marginal area development is proposed.